

コメント

黒沢文貴

只今ご紹介いただきました東京女子大学の黒沢文貴です。私の専門は歴史学で、日本近代史を専攻しております。文学部の出身で、法学部ではありません。昨年岩波書店から出版されました『丸山眞男集別集』第三巻の中に、つぎのような丸山眞男の発言があります¹。

「歴史家というのは、……始末の悪いほど事実信仰で、……事実としての思想というものがわからないんです、歴史家は。……事実としての思想というものが、歴史家の頭のなかには驚くほどないです。出来事主義なんだよ。……一般的に歴史家は、ぼくは思想音痴だと思っんです。」

丸山も自身を「歴史家」と称することがありますので、ここでいう「歴史家」は、おそらく文学部出身者を指すものと思われれます。

というところで、本日は「思想音痴」な文学部出身者が、討論者という荷の重いお役目を果たさなければなりません。しかし、敗戦後の三島の庶民大学で非専門家の皆さんとの交流を喜ばれた丸山ですから、本日の私のいささか場違いなお務めも温かく見守っていただけないかと思っています。

さて、今回のシンポジウムのテーマは「新しい丸山眞男像の発見」

です。そうしたテーマが設定された背景には、それを可能にした、少なくとも二つの理由があると思います。まず第一が、一九九六年に丸山が没してから二〇年がたち、その学問と思想、また人物が、より客観的に研究しうる対象になってきたということです。二〇年という月日は、客観的な研究をおこなうにはいささか短いような気もしますが、二一年前の戦後五〇年の年の内閣が村山富市内閣で、戦後七〇年の内閣が安倍晋三内閣であることを思えば、今日においては二〇年という考察対象との時間的距離は、十分に歴史研究の対象となりうる時の経過ではないかと思えます。

理由の第二は、丸山没後から今日にいたるまでの間に、丸山の学問と思想、そして肉声を伝えるきわめて多くの出版物が刊行されたことです。歴史的にいえば、研究のもとになる基礎的な資料が、かなりそろってきたということです。

たとえば、『丸山眞男集』全一六巻別巻一（岩波書店、一九九五年—一九九七年、これは正確には生前から刊行がはじまりましたが）、『丸山眞男座談』全九巻（岩波書店、一九九八年）、『丸山眞男講義録』全七冊（東京大学出版会、一九九八年—二〇〇〇年）、『丸山眞男回顧談』

上下（岩波書店、二〇〇六年、二〇一六年に『定本 丸山眞男回顧談』上下）、『丸山眞男書簡集』（みすず書房、二〇〇三年―二〇〇四年）、『丸山眞男話文集』全四巻（みすず書房、二〇〇八年―二〇〇九年）、『丸山眞男話文集 続』全四巻（みすず書房、二〇一四年―二〇一五年）、そして『丸山眞男手帖』（丸山眞男手帖の会）と『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』（東京女子大学）など。

近年では、主として東京女子大学丸山眞男文庫の所蔵資料をもとに編纂された『丸山眞男集 別集』が全五巻の予定で現在第三巻まで刊行されています（岩波書店、二〇一四年―）、『丸山眞男講義録』の第二弾の出版も予定されています。

またさらには、丸山眞男文庫所蔵資料の公開も徐々に進み、昨年（二〇一五年）にはインターネットでみることできる丸山文庫草稿類デジタルアーカイブやバーチャル書庫などが始動しました。

このように既刊の資料に加えて、新しく利用可能な資料が続々と世に出されたことによって、丸山の思想と学問、また人となりを、より本格的な研究対象とすることが可能になってきたわけです。丸山の議論をより内在的に理解する、彼の思想をより深く理解する、しかも人間丸山の内面にまでより深く分け入ってその議論を理解することが、かなり可能になってきたのではないかと思われます。没後二〇年がたち、いわば丸山眞男の全体像を解明しうる段階に、いよいよ入ってきたといえましょう。

なお丸山眞男の著作物や発言等を歴史的資料としてみ、丸山そのも

のを歴史研究の対象にすることについては、今年出版されました『定本 丸山眞男回顧談』下に収録されています平石直昭先生の「解説」が非常に参考になります。ここでは、丸山が『現代政治の思想と行動』などの自著を戦後思想史の「記録」や「資料」として位置づけ「読者に提供」していたこと、やがて自らが「歴史的客体」になることを意識していたことが指摘されています²⁾。

ということ、ここであらためてお断り申し上げますが、丸山眞男はそういったことすでに「歴史的客体」になっておりますので、敬称等は省略させていただきます。平石先生については、まだ「歴史的客体」になっておりませんので、「先生」をつけて呼ばさせていただきます。

前置きはこれくらいにしまして、では、新しい丸山眞男像を見つけるための視点として、どのようなことが考えられるのでしょうか。ひとまずここでは、いくつかの視点について指摘しておきたいと思えます。

一点目ですが、平石先生は先ほど紹介しました「解説」のなかで、「思想形成史と人格史とが不可分だとすれば、丸山の学問を理解するためには、結局、彼の人間形成の過程、個人史を理解する必要があります」となる³⁾。「彼の学問のあり方自体が、その十分な理解のためには、彼の思想と人間の理解へと深まらねばならない構造をもっていたわけである」と述べられています³⁾。このご指摘がまず重要だと思えます。

丸山の個人史、とりわけその内面にかかわる側面をあらためて再検討

する必要があるのでないでしょうか。

その意味で、今回のアンドリュー・バーシェイさんのご報告は、きわめて示唆に富むものでありました。丸山が何のために、何に依拠して研究してきたのかという、いわば丸山の存在証明、アイデンティティに注目し、それを明らかにすることが丸山を蘇生させることにつながるのではないかが、バーシェイさんの議論だと思えます。そこで彼は、親鸞とドストエフスキーにかかわる丸山の発言をもとに、丸山が世界を絶望的にみていたこと、根本悪の問題が丸山の人格的自律や主体性の観念を内面的に裏づけていたこと、人は無限の自己欺瞞能力をもっているとの認識、そして、それらが政治や個人の生き方を丸山が考察する際の基調になっていたのではないかと述べられています。

なお、この点に関連していえば、丸山の第一高等学校時代の留置場体験は、己の内面的な弱さを強く自覚させるものであったわけですが（ある意味では死刑寸前までいったドストエフスキーと似たような体験をしたといえなくもありません）、丸山の思想と学問を考えるうえにもつその内面的弱さの自覚（傷）の重要性をあらためて確認する必要があるかと思えます。⁴

またさらに、クリスチャンになることなしにプロテスタントになった丸山のプロテスタント的想像力が、政治権力者を駆り立てる悪魔的な心理的衝動、伝統や社会的惰性の力、マスメディアが生む画一性への圧力などを認識する近代的な主体的な人格の把握に彼を導いたこと

を指摘されています。

他方、宗教社会学者のロバート・ベラーと丸山とが、ともに自己変革と持続的革新を可能にするような近代社会秩序を構想していたことも指摘されています。こうした丸山とアメリカの学者との知的交流ということでは、清水靖久氏が詳細に明らかにされておられるように、一九六一年と七三年の渡米に際して丸山がビザを拒否されたとき、その解除に向けて多くのアメリカの研究者が尽力したこと、「全共闘にやられた」ことや東大の退職を知った英米の学者たち、すなわち丸山が「同じ「学問共和国」の住人」と呼んだ人々からのお見舞いと激励に丸山が大いに慰められたという事実が思い出されます。⁵

しかし、そうした交流のエピソードは、他面では、丸山のアメリカ認識が、極端にいえば、そうした友人たちを通じた個人理解であって、アメリカそのものの理解であったと果たしているのかどうかという疑問を抱かせることにもなります（もともと丸山は、この点に自覚的であったとは思いますが）。アメリカと丸山との関係については、近年研究がなされてきましたが、丸山がアメリカに対してみせる当初の逡巡が何であったのかも含めて、さらに解き明かしていくことが必要なのではないでしょうか。

またそれとの関係で、哲学者のミシェル・フーコーが丸山をフランスに招へいしようとしていたことはよく知られていますが、ではなぜ欧米の学者たちは、丸山を自国に招こうとしていたのでしょうか。欧米の知識人たちにとって、丸山の魅力とはどういったところにあった

のでしょうか。丸山が欧米の知識人たちに及ぼした影響とはどのようなものであったのでしょうか。バーシェイさんが丸山とペラーとの知的交流と関係性を明らかにしたように、英独仏を含む他の欧米知識人たちと丸山との交流を、あらためて再考してみてもいいのではないかと思います。

なお、その点に関連して、ドイツの知識人たちとの交流は、英米ほどには多くなかったように思われます。本日ヴォルフガング・ザイフェルトさんは、丸山がドイツの学者たちから受けた大きな影響についてご報告してくださいましたが（丸山のカール・シュミット理解についてはもう少し詳しくお聞きしたかったです）、影響の大きさに比して奇妙なほどに少ないように見えるドイツの知識人たちとの交流について、さらにザイフェルトさんにお教えいただければと思います。それはまたドイツ人にとって丸山の研究がどのように理解されていたのか、またザイフェルトさんとは違う世代である今日のドイツの若者にとっても丸山は魅力的な知的存在でありうるのか、ありうるとしたらそれはどういう意味においてなのか、ということのご質問でもあります。

さらに「世界大の視圏と交流」ということでいえば、丸山とアジアとの関係が気になります。本日は、孫歌先生と金錫根先生からご報告を頂きました。アジアとはいっても、具体的には中国と韓国ということになります。丸山とアジア、もしくは丸山と中国、韓国（話を戦前に限れば、朝鮮ということになります）というとき、これはまったく

くの私的印象ですが、欧米との濃密な関係と対比して、丸山はあまり多くを語ってはいないように思われます。中国については、その道の専門家である中国研究者にいわばお任せして、自身ではある意味禁欲的に深入りをしなかったようです。その意味では、丸山が孫文の三民主義に着目した論文は、きわめて珍しいものといえるのかもしれない。

孫歌さんのご報告によれば、丸山の孫文研究は「他者を他在において理解する」という丸山の常に実践してきた思考により考察されたものですが、とくに伝統と近代の創出との関係をめぐって、孫文と丸山との間でズレがあったことを指摘されています。このズレは、ある意味では、後年丸山が問題にした「古層」の問題にも関係づけて理解することができるようだと思います。すなわち、丸山の属する日本における古層と孫文の属する中国における古層との違いが、そうしたズレを生じさせる背景にあったのではないかとということです。はたしてそのような違いとして理解することはできるのでしょうか。その点も含めて、孫歌さんには、丸山と孫文のズレの意味について、さらに詳しくお話しただければと思います。

さらに丸山にとつての中国という場合、親友の竹内好や武田泰淳の名前が思い浮かびます。とくに「方法としてのアジア」を提唱した竹内好の知的刺激が大きかったと思いますが、その割には最初に述べたように、丸山の学問にどれほどの影響を与えたのか、その痕跡はいまひとつ不鮮明な気がします。（鶴見和子さんの提唱された内発的

発展論もありました。丸山にとつての中国の意味、中国が与えた影響についても、孫歌さんのお考えをお聞かせいただければと思います。

次に金錫根さんにも、ある意味では、同じような質問をさせていただきます。丸山は朝鮮の視点の欠落をみずから認識しており、むしろ韓国人留学生であった朴忠錫さんの博士論文を指導するなかで朝鮮・韓国のことを学び、認識を深めていったようです。そうした丸山にとつての戦前期朝鮮、そして韓国の意味とはどのようなものであったと、金さんはお考えでしょうか。また、そうした韓国認識の弱さを含む丸山は、金さんとは時代状況が異なるなかで育ってきた現代の韓国の若者にとつて、どのような学びの対象になりうるとお考えでしょうか。

いずれにせよ、こうした朝鮮・韓国認識の欠落もしくは弱さ、そして先ほど述べました中国認識の弱さは、丸山に足りなかったものとして今日批判することもできるでしょう。しかし「歴史的客体」を現在の高みの位置から裁判官的に断罪することは、歴史研究者としてはあまり感心しないやり方です。丸山の学問と思想をより発展的に継承していこうとするならば、むしろ丸山の精神構造、認識構造、そして学問構造のなかで、なぜそうした朝鮮・中国認識の弱さが存在するのか。もともと多様な思想的背景をもつ家庭環境のなかで社会的形成をはたしてきた良質のリベラリストである丸山においてさえ、そうした認識構造をもつにいたった歴史的背景や要因を、きめ細かく解き明かしていくことが必要なのではないのでしょうか。そうした認識の弱さも含め

て、全体としての丸山眞男が存在するのであり、まさにそうしたものとして丸山を考察してみる必要があるのではないかと思います。

新しい丸山眞男像にかかわる最後の視点として指摘したいのは、先ほど少しふれました「古層」論の重要性です。小林正弥氏が指摘されているように、丸山の問題関心は、主として（1）日本ファシズム⁽⁶⁾Ⅱ超国家主義の分析とその再来の防止、（2）民主主義の確立、（3）講和問題や安保問題を中心とする平和問題にありました。

それら諸課題の実現は、丸山の存命中はもちろん現在においても、いまだに現在進行形の課題といえます。なかでもファシズムの問題は、丸山にとつて終生変わることのない最大の問題でした。それはファシズム（強制的同質化と画一化、そして排外主義との結びつき）の克服が日本だけの問題ではなく、アメリカのマッカーシズムにみられるように、戦後の自由世界や資本主義国一般にもあらわれうるものであり、それがさらに大衆社会状況と情報化社会の到来と関連づけて認識されたからです。

ファシズムを克服するためには、それに抗しえる自立した主体的個人が必要でした。しかし、日本においてそれは、占領期の逆コース・冷戦・六〇年安保などの状況のなか、その生成・創出が困難であるのみならず、大衆社会・情報化社会の進展による個の逼塞状態の出現という社会の変化によってもなかなか果しえない課題でした。そうした主体的変革を困難にする外在的状況が次々と生まれることへのいらだちやある種の焦燥感が丸山をして、さらに日本の歴史の奥深くへと分

け入る古層論へと向かわせたのかもしれませんが。

そして古層論は、よく知られているように文化接触論に触発されたものでもありません。自立した個人の成立条件、逆にいえば、自立した個人の成立を阻む要因を、日本社会と文化に内在するものとして見つけだそうとする試みははじまりました。歴史意識・政治意識・倫理意識の三つの古層は、いずれも個々人の主体的作為を妨げ責任をあいまいにする方向で作用するものとしてありました。それゆえ、その古層＝要因がわかれば、それを乗り越える自己変革が可能になるはずで、す。「正統と異端」の問題を手掛かりにして進められたその試みは、しかし丸山の死によって未完のまま終わりました。したがって、古層をいかにして打破し、自立した個人を創出しようのかは、現在のわれわれに残された、発展的に継承すべき課題となったのです。

丸山の学問的成果は欧米のみならず、中国、韓国をも含めて広く世界に受け入れられました。それゆえ丸山は、自らの学問と思考のもつ普遍性を当然のことながら自覚していたと思います。とすると、そうした自覚は、最後に取り組んでいた古層論にも当てはまるものかもしれません。丸山がどの程度古層論の普遍性について自覚的であったのかはわかりません。しかし古層論が、もしかしたら西洋各国にはなじみにくい方法論であるかもしれませんが（もっともキリスト教文化圏における古層と考えれば、適用可能かもしれません⁷⁾）、少なくとも共に長い歴史を有する中国と韓国には適用しうる可能性をもつ思考の方法であることを、丸山は分かっていたのではないのでしょうか（もち

ろん古層の定義づけにもよりますが）。もしそうであるとするならば、丸山は晩年には、非西洋圏における近代化という共通の歴史的経験をもち、かつかつては同じ儒教文化圏に属していた日中韓三国（東アジア）の政治・社会・文化・思想のあり方に思いをはせていたのかもしれない。

そこで最後のご質問になりますが、古層論のもつ意味について、三人の先生方のお考えをさらにお聞かせいただければと思います。

以上、ご静聴ありがとうございました。

注

- (1) 丸山眞男『加藤周一著作集』をめぐって（東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集別集』第三巻、岩波書店、二〇一五年）二八〇―二八一頁。
- (2) 平石直昭「解説」（松沢弘陽・植手通有・平石直昭編『定本丸山眞男回顧談』下巻、岩波書店、二〇一六年）三三八、三四〇、三四二、三四九、三五一、三四三頁。
- (3) 同右、三四八―三四九頁。
- (4) 荻部直「丸山眞男―リベラリストの肖像」（岩波新書、二〇〇六年）五一頁参照。
- (5) 清水靖久「丸山眞男と米国」（『法政研究』第七四巻第四号、九州大学法政学会、二〇〇八年三月）参照。他に、江上琢成「丸山眞男のアメリカ観」（『KEIO SFC JOURNAL』Vol.13 No.1 慶應義塾大学湘南藤沢学会、二〇一三年九月）も参照された。
- (6) 小林正弥「序章 丸山眞男と公共哲学」および「終章 丸山眞男の思想的発展」（小林正弥編『丸山眞男論―主体的作為、ファシズム、市民社会』東京大

- 学出版会、二〇〇三年）を参照。また都築勉『戦後日本の知識人―丸山眞男とその時代』（世織書房、一九九五年）、同『丸山眞男への道案内』（吉田書店、二〇一三年）も参照。
- (7) 中野智世・前田更子・渡邊千秋・尾崎修治編著『近代ヨーロッパとキリスト教―カトリシズムの社会史』（勁草書房、二〇一六年）参照。

